

1年1組 福地 真愛 「異能力バトル」



私が紹介したいものは、アニメ「文豪ストレイドッグス」です。  
この作品を初めて見たのは、つい最近で、いとこの部屋にこの作品のグッズがたくさん飾ってあり、この作品に興味湧き、たまたま8月から再放送されることを知って見たら私もいとこと同じくハマってしまいました。

—福地さんのおすすめ本—

文豪ストレイドッグス 1～21巻(現在)  
著：朝霧加加 星河ゆい他 KADOKAWA

この作品は太宰治や芥川龍之介をはじめとした有名な文豪が、現代風のキャラクターになって登場する「異能力バトルアニメ」です。キャラクターのそれぞれが特殊な異能力を持ち、その能力名が各文豪の有名な作品やエピソードが元になっているのが面白いところです。異能力を持つキャラクターは、主人公が所属している「武装探偵社」と、夜の街を陰から支配している「ポートマフィア」に分かれています。  
まず、「武装探偵社」から紹介します。この作品の主人公は中島敦という青年です。孤児院から追い出され、能力を自覚できないまま暴走していたところに太宰治と出会い救われるところから話は始まります。太宰治が所属していたところが「武装探偵社」でした。「武装探偵社」は一般の警察や探偵では解決できない事件を、異能力を使って解決する組織です。

続いて「ポートマフィア」を紹介します。高い能力を持つ中島敦には高い報酬金が付けられていて報酬金目当てに敦に目を付けて襲ってきたのが最初でした。「ポートマフィア」は夜の街を陰から支配していると言っても過言ではない過激派集団です。  
これだけを紹介すると怖そうなアニメと思うかもしれませんが、キャラクターがかっこよく、面白いシーンもたくさんあって楽しいアニメなので、是非見てみてください。

1年2組 鈴木 倭音 「深い言葉」

自分は、バスケットボール部に所属していることから「スラムダンク」に興味を持ちました。見てみたら内容が面白く、心に残る言葉や考えさせられる言葉がたくさんありました。  
スラムダンクはこれからも繰り返し読みたい本の一つになりました。  
今回は数ある名言の中から、特に好きな言葉2つについて自分なりの考えをまとめてみました。

—鈴木君のおすすめ本—

スラムダンク新装再編版 1～20巻  
著：井上雄彦 集英社



スラムダンクの好きな言葉①  
「諦めたらそこで試合終了ですよ」

この言葉はバスケ部の顧問である安西先生の名言です。自分も聞いたことのある言葉でした。この言葉は勝利だけがすべてではなく、負けることも人生でとても大切な経験という意味をもっていると思います。この言葉にかなり考えさせられました。たしかに私はいろいろな場面で勝利ということしか頭になかったかと思います。しかしそうではなく、負けても成長につながるんだという自信に少しつながりました。

スラムダンクの好きな言葉②  
「天才とは99%の才能と1%の努力」

この言葉はかなりすごいと思います。1%の努力がなければ99%の才能が無駄になるという意味だと思っています。この言葉通りだと思っています。これまで大した努力もしないで才能が無いとか言っていた自分はだめな人間だと反省した言葉です。この言葉にも、とても考えさせられました。



1年3組 古関 彩月 「本っておもしろい」

私は小さい頃から本が好きで、たくさんの本を読んできました。その中でも特に印象に残っているものを2冊紹介します。

—古関さんのおすすめ本—

レ・ミゼラブル  
著：ヴィクトル・ユゴー

戦争は女の顔をしていない  
著：スヴェトラナ・アレクシェーヴィチ  
訳：三浦みどり  
岩波書店

コミック版  
画：小梅けいと  
KADOKAWA



1冊目はビクトル・ユゴー作「レ・ミゼラブル」です。  
この作品は、長い刑期を終え希望を胸に町にやってきたジャン・バルジャンという男が、世間の冷たい仕打ちに打ちのめされても最終的には本当の愛を見つけて幕を閉じるという物語です。  
1回や2回だけではなく、何回も挫折しているにも関わらず、ジャン・バルジャンのいつでも必死に人々を助け、知恵を出し生きている姿はとても勇気づけられます。もともとジャン・バルジャンは一つのパンを盗み出して19年という長い間、刑務所に入れられていました。その場にいた人たちからしたら、最悪な人間・信用してはいけないと思うかもしれませんが、ジャン・バルジャン視点からすれば、兄妹のために食べ物を持って帰りたいという愛が出ています。パンを盗んだのは確かに罪だと思っています。でも、その反面この行動は愛がないとできないことだと思っています。

2作品目はスヴェトラナ・アレクシェーヴィチ作、三浦みどり訳の「戦争は女の顔をしていない」です。  
この作品は、第二次世界大戦中のソ連で戦った従軍女性が実際に体験した話が書かれています。彼女たちの経験したことや感じたことがありのまま書かれているので、最初は少し気持ちが悪くなったりしましたが、話を読み進めていくうちに仲間同士の絆や家族への思い、本当の自分自身を見つめ直す思いがわかる本です。  
この本は女性の視点だからこそ見えてくる戦争の裏側だと思っています。  
初めのほうは暗くて重い話しですが読み進めていくと未来への光が見えてきます。

